



大学史資料室所蔵史料の紹介(五)

貴重書室から―その一 江戸の農書―

東京農業大学図書館七階の大学史資料室は、貴重書室も兼ねており、ここには江戸から明治にかけての農業古典籍や資料等、とくに第四代館長大野史朗先生(在職期間一九一八～一九六四年)が長い年月をかけて収集したコレクションを中核とする貴重書が所蔵されている。大野先生は、歴代の館長とは異なり、大学教授ではなく、司書から館長となったが、第二次世界大戦前後の四十六年間を図書館一筋に歩み、農大図書館史上、最大の功績を遺した。一九六八年(昭和四三)に完成した旧図書館の建設に尽力したのも大野先生である。大野先生には、東京農業大学図書館職員としての経歴を活かした業績として、『農学文献目録 第一輯』(一九三〇、大正一五年から昭和四年までの農学文献目録)、『同第二輯』(一九三一、昭和五年分の目録)、『農業事物起原集成』(一九三五)、『東京農業大学五十年史』(一九四〇)などの編著書がある。とくに『農業事物起原集成』は、「ア(藍)」から始まり、「ワ(割地制度)」に終わる、農業に関連する事物の起原を、おびただしい数の本を渉獵した結果得た該博な知識をもとにまとめたユニークな著書で、一九七八年に復刻、青史社から刊行されている。

さて、貴重書室の蔵書の一部は、「貴重書コレクション」として電子化され、図書館HPで公開されている。電子化されているのは、江戸時代のものとしては、日本に初めて近代化学を紹介した宇田川榕庵の『舎密開宗』や、同じく榕庵による西洋植物学紹介の嚆矢『植学啓源』、百珍物の代表とされる何必醇の『豆腐百珍』などの料理書、わが国の代表的な食用本草書である野必大の『本朝食鑑』、明治期では田中芳男『有用植物図説』など様々である。ここでは、江戸農書の代表として、電子化されている宮崎安貞の『農業全書』と大蔵永常の『農具便利論』、および電子化はされていないが日本農学史にとっては重要な田村仁左衛門の『農業自得』と河野貞造の『農家備要』について紹介してみたい。

宮崎安貞（みやざき・やすさだ）は、一六二三年（元和九）、広島（安芸）藩士・宮崎儀右衛門の二男として生まれた。二五歳のとき福岡藩主黒田忠之に仕えたが、のちこれを辞して、筑前国志摩郡女原村（福岡市西区）に住み、農業のかたわら、農業技術の改良・農民指導などに努めた。その間、畿内をはじめ伊勢などの諸国を巡って農事の研究・調査をするともに、徐光啓の『農政全書』など中国の農書や本草学を学び、それら

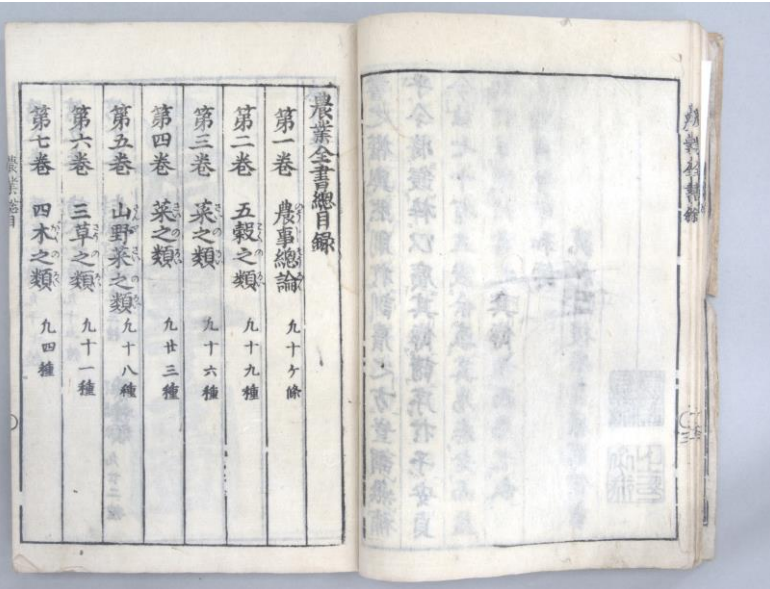
をもとに『農業全書』を完成させた。また、本草学者としても知られる貝原益軒（福岡藩の人）と交わり、本草学の知識を得た。一六九七年（元禄一〇）七月二三日没。享年七五歳であった。墓は福岡市西区女原にある。『農業全書』の初版は、一六九七年（元禄一〇）に、京都の茨木多左衛門によって刊行された。天明、文化、文政年間にも再版され、明治以降も何度か復刻されている。この農書は、当時著された農書の多くがそうであったような地方的農書の域を超え、農業技術体系の総合化を図ったもので、江戸時代を代表する農書である。巻の一「農事総論」以下、巻の十「薬種の類」までの全一〇巻、および「附録」の巻十一から成る。貝原益軒の叙文と跋文がつき、また附録一卷は益軒の兄榮軒の手になる。貴重書室が所蔵するのは、天明再版の『農業全書』である。

宮崎安貞と並び称される江戸期の大農学者が大蔵永常（おおくら・ながつね）である。永常は、一七六八年（明和五）、豊後国日田郡隈町（大分県日田市）に製蠟問屋の職人の子として生まれた。二〇歳のころ、故郷を出て、九州各地を遍歴し、二九歳のときに大坂に出た。大坂で苗木商を営む間に『農家益』（一八〇二年「享和二」刊）を著した。同書によって永常の名は全国に知られるようになり、その後も、『老農茶話』『豊稼録』



『農具便利論』（*）

『農業全書』（*）



『農具便利論』などの農書を刊行し、やがて江戸に移り、関東各地を歩いてさらに多くの農書を著述した。一八三四年（天保五）三河田原藩江戸詰家老・渡辺華山の推挙で同藩に仕官、さらに一八四二年（天保一三）老中水野忠邦の招きを受けて浜松藩興産方に赴任した。天保改革の失敗で水野が老中を罷免されると、浜松藩を辞した。一八四六年（弘化三）、妻を失い、再び江

戸に出て著作に専念し、生涯に三三部七九巻の著作を出版した。しかし、その没年と死没地は不明である。永常の農書の多くは、限定的な主題に関するものが多いが、一八二二年（文化五）に初版が刊行された『農具便利論』上中下三巻も同様で、当時各地で使用されていた優れた農具を図入りで紹介している。貴重書室所蔵本もこの初版である。

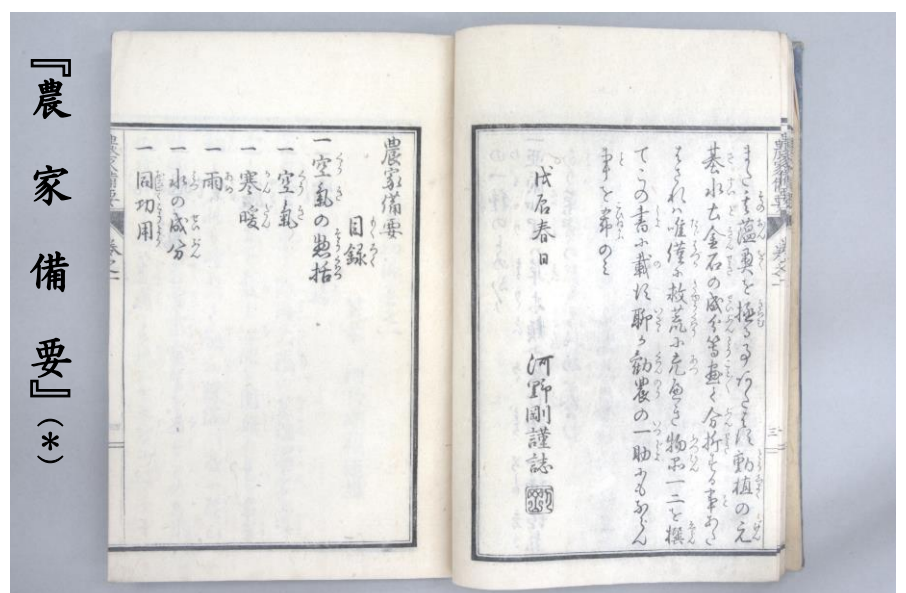
農書の中でも特異な位置を占めるのが、田村仁左衛門（たむら・にぎえもん）の『農業自得』である。仁左衛門は、一七九〇年（寛政二）、下野国河内郡下蒲生村（栃木県河内郡上三川町下蒲生）に名主の長男として生まれた。名は吉茂。父にしたがい幼少の頃から農業にいそしみ、自ら



の多年にわたる実験と記録をもとにして、一八四一年（天保一二）に『農業自得』および『農家肝用記』を完

成させた。さらに幕末から明治初年にかけて『農童心得草』『吉茂子孫訓』『農家根元考』『農家根元記』『吉茂遺訓』『田村家訓』を著すなど、晩年に至るまで盛んに筆をとった。一八七七年（明治一〇）四月没。享年八八歳であった。主著『農業自得』の初版は、一八五二年（嘉永五）書林知新堂より刊行された。同書は前述のように、自らの多年にわたる実験・観察の結果から著された農書で、「近世期の農書を通じて、最も農民的な農書」として高く評価されている。一八八一年（明治一四）、孫の仁八郎により附録・附言とあわせて再刊された。貴重書室所蔵本は一八五七年（安政四）版である。

最後に、江戸期の伝統農法から明治期の近代農学への過渡期を代表する農書が、河野禎造（かわの・ていぞう）の『農家備要』である。禎造は、一八一八年（文化一四）、筑前国糸島郡波多江村（福岡県糸島市）に、医師で国学者であった原田種彦の三男として生まれた。名は剛。福岡藩医河野家の養子となり、家督を相続した。一八四九年（嘉永二）藩命で長崎に遊学、ファン・デン・ブルックおよびシーボルトから医学・化学を修得した。ブルックから貸与された蘭語の化学書を、藩命で翻訳し、一八五九年（安政六）に『舎密便覧』として出版した。藩の事業縮小で失職したが、五〇歳のとき農業の改良をめざし各地を巡



『農家備要』(*)

察、一八七〇年（明治三）に『農家備要』と、その啓蒙普及版として折本『農業花暦』を出版した。死の直前は京都府権参事であった。一八七一年（明治四）二月に没した。『農家備要』は、前編全五冊で、伝統的な在来の農業知識と、幕末に隆盛した国学、そして蘭学に基づく科学知識とが混交しあい、まさに近代移行期を象徴するような農書である。

国際食料情報学部長 友田清彦

榎本校主と農学校の生徒たち

東京農業大学は今年創立一二四年を迎える。本学の創設者である榎本武揚については色々なことが伝えられている。確かに優秀な人であり、また有能な方であったことには間違いがない。……

育英黌を創設した榎本は、管理長(明治二四年三月六日)明治二六年五月一〇日)、育英黌を改名し東京農学校の校主(明治二六年五月一日)明治三一年八月一六日)であった。在任していた期間は七年間である。

この間も明治政府を確固たるものにする為、主要大臣(明治二四年五月 外務大臣、明治二七年一月 農商務大臣)として政務に忙殺されていたと思われる。

では教育者としての榎本はどのような方だったのだろう。

明治二四年三月六日に開校した育英黌は順風満帆というわけにはいかず、農業科以外の商業科、普通科はほとんど有名無実であった。というのは、当時次第に盛んになった官立学校の整備に影響されて、生徒も集まらなかったのである。そうしたなかで農業科のみが存続し得たのは、榎本の教育方針にあったといえるだろう。

徳川幕府瓦解のおり、新政府に反旗を翻した榎本が、幕府軍艦を率いて品川を脱出、箱館五

稜郭に拠つて勇戦したことは、維新史上あまりにも有名だが、このときすでに榎本の胸中には、北海道を開拓して農業を主とした産業を興し、独立国を樹立しようとする計画があった。雄図むなしく敗戦の将となったが、その後、明治新政府に抜擢されて、開拓使四等出仕を命ぜられ、北海道の実地調査に従事してからは、農業拓殖に対する関心はいっそう強まっていた。

育英黌農業科の後身である東京農学校の第二回卒業式に、榎本が校主として述べた式辞からも、その一端をうかがい知ることができる。(後述)榎本の近代農業に対する期待と拓殖への気概が横溢している。この期待と気概が、育英黌不振のなかにあつて、農業科存続の基となったことは疑いのないところである。

さて、榎本と育英黌、東京農学校の生徒との関係を示す資料として残されているものは、今回取り上げた、① 第一回卒業式の記念写真、② 校主榎本が直接生徒に語り掛けた記録(第二回卒業式と第三回卒業式での告示)、③ 育英黌の生徒であつた天野喜之助に発行した自筆の身分証明書、さらに今回保存されている資料の中にあつたのは、④ 育英黌(明治二四年三月六日)を創立した七か月後の一〇月に撮られた教職員、生徒の集合写真である。

① 第一回卒業式の記念写真(＊)

第一回の卒業式は明治二六年七月二一日におこなわれた。

しかし公式行事としての式典の記録はなく、従つて校主であつた榎本の言葉の記録がない。卒業記念写真が一葉あるのみである。校主榎本が中央に、校長伊庭想太郎が右隣に坐している。



② 校主榎本が直接生徒に語り掛けた記録

さて、管理長、校主としての榎本は東京農学校の新徒にどのように接し、自身の夢、理想を語ったのだろうか。

第二回卒業式と第三回卒業式の式辞である。この式辞だけが生徒に直接話した記録である。以下にその全文を掲載した。

本校第二回卒業式景況

明治二八年一二月発行 農友会会報第四号

本年（明治二八年）九月二八日本校講堂内に於いて第二回卒業式を挙行せらる。当日は早朝より曇天にて怪しき空合いなるにも係わらず多数の出席者ありて、先ず第一鈴、生徒及び授証者着席、第二鈴、本校職員及び招待者着席、続いて校主榎本子爵、伊庭校長の案内にて臨場せられ、以て卒業本科一二名専科二名順次証書を授与せらる。右終わりて校主の懇篤なる演説、校長伊庭想太郎君、教頭本多岩次郎君、評議員総代澤野淳君、来賓工学士若田由次郎君は卒業生今後の方針等に付き演説祝辞、次いで卒業生総代片岡親一君の答辞、学生総代藤田鶴雄君の祝辞等あり。式全く終わり、第三鈴により一同退場各休憩場に於いて本校農場に於いて栽培せし甘藷、南瓜、里芋等を以て酒果の饗応ありて随意退席せしは零時三十分。当日重なる来賓は、公爵三条公美、海軍中将男爵赤松則良、安藤男爵、山本海軍中佐、郡司海軍大尉、澤野農事試験場長、横井農学士、及び豊永、長

岡の三農科大学教授、成松、岡安、安田の三地質調査所技手、森大日本農会幹事、若山分析所長、雨宮敬次郎君、芳野世経君、佐久間貞一君、江原素六君等、卒業生、親戚、実業家等無慮七〇余名にして開校以来未曾有の盛事なりし。

今左に校主榎本子爵その他（割愛）祝詞演説等を挙げん。

校主榎本子爵の演説

ただ今卒業証書を受けられたる諸子に向けて一言せんと欲す。先ず第一に諸子には三ヶ年間、蛍雪の勞空しからずして、遂に本日及第生となりられたるは諸子を我農業社会に紹介するに何より良き引き出物にして、諸子の父兄は申すまでもなく本校の校主たる拙者に於いても誠に無限の慶事なり。

そもそも農工商の三大事業は何れも宇内国に於ける富国の要素たるは言を待たずと雖も、取り分け我皇国は農を以て建国の基と為し来れるだけありて、所謂（いわゆる）集約（インテンシブ）農業に於いては殆ど世界に多く比類を見ざるほどに発達しおれり。是れ畢竟（ひっきょう）土壌の膏そうなると、季候適宜なるとに依ると雖も、そもそも又我が同胞、農事に熟練する特性の民た

るに由らざんばあらず。近来欧米各国より我が国の農事視察に来る者比年多を加えるも亦宣なり。然るに説を為す者あり。

曰く、我邦は土狭く人多く現に農民は我人口六割以上に達し而して田畑の総反別を平均すれば、一人一反八畝に過ぎず田畑の開拓は人口の増加に伴うを得ざるを以て、将来農事の隆替は予知するを得ざるべしと。予を以て此れを見れば是れ其の一を知つて、未だ其の二を知らざるの論なり。

今二一年度の調査によるに、我が内地の総反別は二〇九九万三六四一町にして田畑の総反別は、四二七万四四四町たれば田畑は我が内地面積の二割に過ぎずして、其の他は皆山林原野、若しくは荒蕪不開（こうぶかい）の地たるや。かなりそれは我が農民特有の能力に加うるに學術と実験を以て農業に属する各般の改良を図らば、その国家の富源を増進すべきこと、決して疑を容れるべからず。

又、況や我が北海道の如きは、前文の算外にあるに於いてをや。況や我が新領地たる台湾の如き、蓋し最も農事に望み多しと称するをや。又況や我が東隣の「ラテンアメリカ」各邦及び、南洋諸

島方面には莫大なる膏そうの地、天然の儘にて未だ手を下す者なきに於いてをや。然らば、則ち農業は前途極めて望みあるの事業と謂うべし。

諸子其れ本校に於いて得たる所の技能を實際に施し、以て父兄の業を拡張し、さらに進んで国家富強の基を開かれんこと拙者が切に諸子に望む所なり。

伊庭校長は入学以来の成績を報告せられ、且つ忍耐に付きて非常に演述し以て饒（はなむけ）とせられたり。

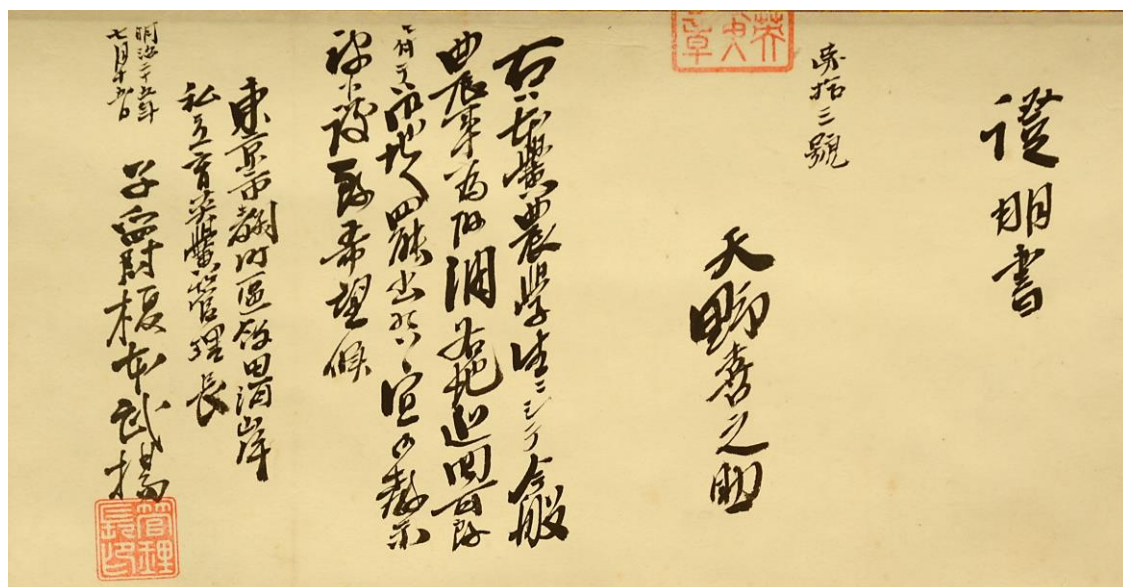
本校第三回卒業証書授与式景況

明治二九年七月発行 農友会会報第五号
本年（明治二九年）七月一三日本校講堂に於いて挙行せらる。今其の順序を記せば午前一〇時一同式場に着席。榎本校主手から卒業生へ証書を授与し終わりて左の演説ありたり。

茲（こゝ）に本日をと（ぼく）し、本校第三回卒業証書授与の式を挙ぐるに会し例により一言以て卒業諸子に告げんと欲する者あり。抑（そもそ）も本校の創立以来歳を閲（けみ）する事未だ多からざるも卒業生を出す事既に三二名の多きに達し遂年盛大の域に赴かんとするは誠に斯学の為慶賀する處なり。

今や我が帝国は戦勝の結果として武威、外に発揚すると共に各般の事業内に勃興し社会の専門学士を要する事甚だ急なり。この時に当たり諸子は国家殷富の源たる農学を修理し、将に出て社会に立たんとす。それ農業なる者は其の区域、甚だ広く天候地味の異なるに従つて、其の産物各同じからず。予が諸子に望む所は独り本邦に在りて業を執る而して已ならず。或いは出でて海外万里の地に赴き居をトし、業を興し以て万国千万の同胞をして農業に新天地あるを知らしむるに在り。此れ豈東邦血性男児の一大快事にあらずや。しかしこれ等の事たる一つに素養ある諸子の力に頼らざるべからず、諸子が前途の負担また大なりと言うべし。此れを要するに諸子は自今而して後社会に出て実業を執るに、あつては過去堂雪の勞に比してさらに幾倍の艱苦あるべきを以て自ら期せざるべからず。古語に言う。「これを言うは易く行ふは難し」と。諸子其れ深く己を慎み、事に臨みては着実を旨とし、虚栄を慕わず以て其の涵養するところの學術技芸を活用せば庶幾くは過なきを得ん。聊か所見を述べ諸子に告ぐる事この如し。

③ 育英費生徒の天野喜之助に発行した榎本自筆の身分証明書（*）
明治二五年七月一九日発行、三人目、三号である。



④ 育英黌(明治二四年三月六日)を創立した七か月後の一〇月に撮られた写真(＊)

最初に設置された東京市麹町区飯田川岸第四号の三(現JR中央線飯田橋駅構内)にあった校舎前での記念写真である。この写真が大学史資料室に保存されている最古のものと思われる。写真には「育英黌農業科時代教員及生徒」更に「明治二四年一〇月荒川重秀氏送別記念」とある。

黎明期の育英黌として東京農学校と校主榎本に思いを馳せた時、創立一二五年に喟々とし

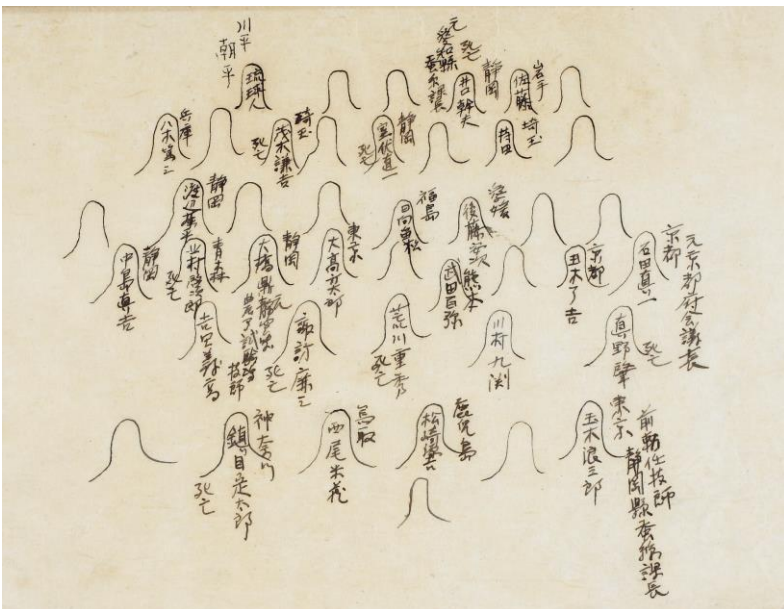


農学、生物系の旗手として走り続ける現在の東京農業大学の姿を誰が想像し得たであろうか。校主榎本の理想が着実に実を結んでいる事を実感する今日この頃である。

資料

榎本武揚と東京農大 松田藤四郎
農友会会報
東京農業大学五〇周年史
証明書(寄贈)瑞穂町長 石塚幸右衛門

名誉教授 内村 泰



東京農業大学の人々(四)——長岡宗好——

一八九三年(明治二六)、農業科が育英黌から独立し、私立東京農学校となった直後、同校教頭は短期間のうちに相次いで交代した。本紙第4号で紹介した河村九淵のあとは翌一八九四年までの間に、沢村真、豊永真理、長岡宗好といった具合であった。この三人はいずれも駒場農学校やその後身である東京農林学校の卒業生である。横井時敬はこれに関して、「かようにして教頭の地位がしばしば動揺したというのは、我が教頭に戴いた諸氏は、皆そうそうたる農学者ばかりであったから、それぞれ然るべき劇職に就かなくてはならないので、勢い我が教頭の任務に服することができなかったのである」と述べているが、そのような中でも長岡宗好は、東京農学校評議員、大日本農会の経営に移ってから大日本農会附属東京農学校商議員を務めるなど、重要な役割を果たした。

長岡宗好と言っても、今日ではその名を知る人はほとんどいないかも知れない。他方、同じ農学者でも、古在由直の名前は比較的知られているよう。一九二〇年(大正九)から八年にわたって東京帝国大学の総長を務めたからであり、また足尾銅山鉍毒事件でも鉍毒被害民側に立って尽力し、「闘うヒューマニスト」と称されたからである。古在には、足尾鉍毒関係の論文として、一八九



二年（明治二五）、『農学会会報』第一六号に発表した「足尾銅山鉍毒ノ研究」がある。これは古在の単著であるが、同年中に政府の機関紙とも言える『官報』に連載された「渡良瀬川沿岸耕地不毛ノ原因及除害法研究成績」は当時帝国大学農科大学助教授であった古在と長岡の共著である。また、これも同じ年、栃木県内務部から刊行された『渡良瀬川沿岸被害原因調査ニ関スル農科大学ノ報告』も古在・長岡の共著である。この報告では、「足尾銅山工業所ニ於テハ汚水清浄ノ設計アルニ拘ハラス尚ホ全ク有毒ナル淤泥ノ渡良瀬川ニ流入シ其河水ヲ濁濁シ其河身ヲ壅塞スルヲ防ク能ハサルハ明白ナル事実ナリ」とし、「被害地ノ有毒物ヲ含有スル所以ハ此淤泥洪水氾濫ノ際田圃ニ澱渣若クハ流入セシニ因ルコト明白」であることを明らかにしている。

長岡はまた、一八九七年（明治三〇）三月、内閣に足尾銅山鉍毒事件調査委員会が置かれる

と、委員に任命され、同じく委員に任命された農学者・坂野初次郎とともに、鉍業停止派としての論陣を張ったが、実現には至らなかった。

一九〇〇年（明治三三）、足尾鉍毒事件史上、有名な川俣事件が起こった。鉍毒被害に関する請願のため上京しようとした農民が警察官と衝突し、起訴された事件であるが、東京控訴院の二審では鉍毒被害地の臨検が行われた。この時の鑑定人三人のうちの一人が横井時敬であり、もう一人が長岡であった。横井は坪刈鑑定、長岡は土壌鑑定を行っている。ちなみに、残り一人の鑑定人は、先に東京農学校の教頭として名前を挙げた豊永真理である。この三人がともに、東京農学校、すなわち現在の東京農工大学の教頭を務めていることは興味深い。この二審判決は、農民側の全面勝訴に近い結果となった。

このように、長岡宗好は足尾鉍毒事件に深く関わっている。それにも係わらず知名度が低い理由の一つは、長岡が比較的若くして亡くなっているためであろう。長岡は、一八六六年（慶応二）、現在の福島県、磐城平藩士の長男として江戸小石川に生まれた。父母とともに郷里平に帰ったのち、横浜の英和学校を経て、一八八三年（明治一六）、駒場農学校予科に入学、本科に進み農芸化学を専攻、一八八八年（明治二一）駒場農学校の後身である東京農林学校卒業と同時に、同校助教授となった。翌年教授、一八九〇

年（明治二三）同校が文部省に移管され帝国大学農科大学となるに及んで同校助教授となった。東京農林学校・農科大学では、古在由直らとともに、御雇ドイツ人教師ケルネルのもとで研究に従事し、米作肥料試験等に関する多くの論文を発表している。一九〇三年（明治三六）農芸化学研究のためドイツ・フランクフルトへ留学、留学中に提出した論文により一九〇六年（明治三九）に農学博士の学位を得、農科大学教授となるも、健康を害して同年に帰国した。その後、闘病生活を送ったが、一九〇七年（明治四〇）、東京市本郷区富士前町の自宅で逝去した。享年四三歳であった。長岡にさらなる命が与えられていたならば、大きな業績を挙げ、その名前は永く日本農学史上に伝えられたに違いない。

（国際食料情報学部長 友田清彦記）

*本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農工大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農工大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農工大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話・03-5477-2526

FAX 03-5477-2546